

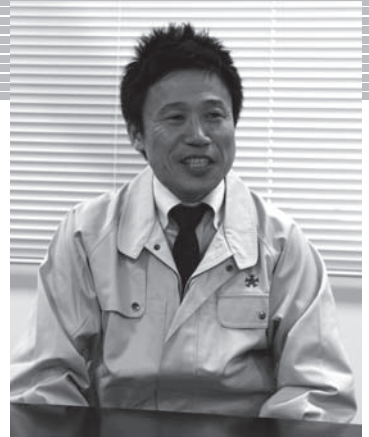
かけだしの頃

今だから話せるゲンバの失敗



大豊建設株式会社 東京支店 土木部 作業所長

西村 典久



1995（平成7）年大豊建設株式会社に入社。
以来、下水道工事や空港の排水溝工事等を経験し、
現在に至る。

積極的なコミュニケーションを大切に

入社して3年目、軟弱な砂地盤の地域で、下水道の推進工事に携わっていたときのことです。所長、主任と私の三人の現場で、私は工事担当者の立場でした。

発進立坑から推進機を使って穴を掘り、下水道管を設置していたのですが、推進機が到達立坑に至った際に、立坑内に水と砂が流出しました。

水や砂の流出量が少ないということもあり、特に問題視せず、十分な状況確認をしないで、その日の作業を終えてしまいました。

夜間施工の現場であったため、次の日の昼、事務所で仮眠をとっている時…「立坑の覆工板脇の車道が陥没している」という連絡が入りました。

私は、とても焦って、とにかく現場へ向かいました。現場に着くとサッカーボールほどの穴が車道に空いていました。今の私であれば原因を考え、すぐに対処できますが、当時は気持ちだけが焦ってしまって精一杯の状態、状況を把握することができませんでした。

もし、前日の砂や水が出た時点で、覆工板を開けて状況の確認をしていれば、覆工板の下に空洞ができていることにすぐに気付けたはずですが、確認作業を怠ってしまったことが、ひとつ目の問題でした。

もうひとつ問題は、必要なコミュニケーションを怠ったことが挙げられます。状況の確認を

する場合、また、不具合が起きていて補修が必要となった場合には、作業員の方の協力が必要ですが、その日の作業がもうすぐ終わるという段階であったため、「覆工板を開けて、確認しましょう」と言い出すことができませんでした。年上の作業員の方が多く、遠慮してしまいました。相談すれば、経験豊富な作業員の方達が冷静な判断をしてくれていたかもしれません。

陥没を復旧する作業は、ちょうど夕方ラッシュ時と重なってしまいました。もともと片側一車線の道路のため、復旧工事に伴う道路規制により大渋滞を引き起こしてしまい、大きな迷惑をかけてしまいました。

これ以来、「同じ失敗はしたくない」という気持ちから、失敗をしないための点検と確認が習慣になりました。また、小さなことでも問題が起きたら上司や同僚、協力会社の作業員の方に積極的に相談し、コミュニケーションをとることが大切だと学びました。

土木の技術者は現場で、発注者、社内、協力会社、地元住民、第三者、他企業者等、多数の関係者と相談しながら仕事を進めていかなければなりません。

年齢が若く、経験が浅いうちであっても、この現場を担っているのは自分だという気持ちで、関係者とコミュニケーションを密に重ねながら、やるべきことを確実に実行してほしいと思います。